S. Ashina

＜キリスト教思想史――古代から中世・宗教改革＞

０．オリエンテーション――宗教と文化　１．キリスト教の成立と初期キリスト教
２．キリスト教教父１――使徒教父、弁証家　３．キリスト教の国教化
４．三位一体論の形成過程とその意義　５．研究発表１
６．修道制の展開　７．キリスト教教父２――アウグスティヌス
８．中世キリスト教世界のダイナミズム　９．キリストと文化――スコラ的文化総合
10. 研究発表２　11. 自然神学と歴史神学　12. イスラームと１２世紀ルネサンス
13. 宗教改革と近代世界（「キリスト教学研究室にて」）

＜前回＞イスラームと１２世紀ルネサンス

（１）中世は暗黒時代ではない

１．中世社会の変動と新しい宗教性の展開
２．大学の時代、中世科学の進展。
外的要因としてのイスラーム
中世キリスト教世界のダイナミズムは、中世の外部としてのイスラームとの相互関係なしには、理解できない。
断続的に繰り返されるルネサンス（イタリア･ルネサンスはその最後の波）

（２）イスラームとキリスト教世界

８世紀、ウマイヤ朝のイベリア半島征服（アッバース朝に滅ぼされたウマイヤ王朝の王族がスペインに逃れる。アンダルシア王国。アンダルス：ムスリムの統治領域）
３．自然学、古代ギリシャからキリスト教世界へ
古代ギリシャの自然学（古代科学）→東ローマ帝国→ペルシャ帝国→イスラーム世界→中世ヨーロッパ世界（イベリア半島など。平和的共存と軍事的接触）
12 世紀ルネサンス、13 世紀中世科学・スコラ：修道院から大学へ
キリスト教的古代から中世までの全体において、文化は東から西に伝播している。
４．十字軍における軍事的接触とは別の経路・別の交流
イベリア半島における三宗教共存（寛容の文化）の一つの可能性
哲学（アリストテレス）、科学（自然学）、建築、文学（11 世紀のイスラームにおける愛の伝統が、トゥルバドゥールの発生を刺激した。ロマンティック・ラブの成立(伊東、1993、227-270)）の相互交流。
レコンキスタによって平和的共存は終焉　→　強制改宗か追放かの時代へ。
マラノか亡命か
６．ヨーロッパを移動する人々による知と文化の交流・伝達
聖地巡礼、移動する労働者（ギルド・職人、商人）、外交交渉、学生・説教者、マイノリティー（女性、ロマ、ユダヤ人）、
・コペルニクス（1473-1543）の場合：ポーランドからイタリアへ

（３）中世科学と 12 世紀ルネサンス

７．イスラーム科学：8 世紀のアッバース革命、この王朝の下でのイスラーム科学（8 世紀から 15 世紀）の黄金時代（8 世紀から 11 世紀は西欧科学を圧倒、12 世紀からラテン世界へ流入）、アラビア語による科学。イラン人、トルコ人、ユダヤ人など。
８．12 世紀ルネサンスの開始：大翻訳運動、アラビア語からラテン語へ。
13 世紀以降の西欧中世の科学的発展
９．「数学的合理性」＋「実験的実証性」→　近代科学
14 世紀の運動論の二つの流れ：ガリレオの先取者たち

13. 宗教改革と近代世界

（１）宗教改革

１．プロテスタンティズムとは何か

宗教改革はプロテスタント教会の歴史的出発点であるが、宗教学的に考えた場合、「プロテスタンティズム」に関しては、次の三つの意味を区別することができる。

・原理としてのプロテスタンティズム（宗教史の構成要素）
・歴史的プロテスタント（教派・組織として）
・プロテスタント時代（プロテスタント教会の存在によって構造が規定された時代）
　→　この意味における「プロテスタント時代」は終了した。

２．宗教改革（ルター、ツヴィングリ、カルヴァンら）とその広がり

1517 年 10 月 31 日、マルティン・ルターは、当時ザクセンで大々的に売り出されていた贖宥状（いわゆる免罪符）に対して、ヴィッテンベルク城教会の扉に「９５箇条の提題」を貼りだし、贖宥についての学問的討論を提起した。それは、カトリック教会の破門決定にもかかわらず、最初の意図を越えてヨーロッパ各地に広がっていった（思いがけない波及効果）。これは、中世後期には、ルターの問題意識に共鳴する思想状況が広く存在していたことを意味しており、宗教改革はルター個人の活動に還元できない歴史的動向と言わねばならないだろう。　→　中世の文脈における宗教改革、中世の諸伝統を無視しては宗教改革は理解できない。

３．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

「信仰のみ」（信仰義認論）、「聖書のみ」、「万人司祭説」

大切なことは、これら三つのスローガンが、それぞれ内的に連関し合っている点であり、ばらばらに理解すべきではない。

４．人間は何によって救われるのか？

・行為義認：人間は善行によって救われる。義人は救われる。何が善行であるかの内容は宗教において様々であるが（宗教儀礼に参加すること、隣人愛を実践すること、毎日祈り聖書を読むこと、献金を捧げることなどなど）、ほとんどの宗教において、行為義認に類した考えは確認可能である。　Q：行為義認と因果応報説の関係を論じよ。
・問題は人は救いに十分なほどの善行を実行できるか、あるいは救いを実感できるのかという点である。ルターは修道院で苦行を実践するが、ついに救いを実感できず、精神的に追い詰められる中で、善行による救いについて根本的な懐疑を至る。贖宥状への疑問はこの文脈から出されたものである。　cf.　贖宥の論理
・ルターは、最終的に、人間の救いは心からキリストの贖罪を信じることによってのみ可能になるとの結論に到達する。これが、「信仰のみ」というスローガンで意味される信仰義認論である。このような罪と救いの理解は、新約聖書のパウロに遡り、アウグスティヌスの思想系譜に立つものである。　cf. 法然や親鸞の思想と比較せよ。
・信仰義認論は、罪や恩寵についての実体論物的理解から、信仰者と神との関係論（罪や恩寵の精神性・内面性）への転換といえる。信じる心の純粋さという個人の人格性が問われることになる。
・もはや、救いは教会制度において媒介されるのではなく、神と個人との関わり合いにおいて成立することなり、またこの救いのあり方は、聖職者でも一般信徒でも変わりがないことになる。ここに、「万人司祭」説が帰結する。人間は救いに関しては、神の前に平等である。これは、イエスの宗教運動における徹底的な平等主義理論の具体化と解することも可能である。
・「信仰のみ」は救いが自己の信仰的決断の事柄であること、つまり自己決定の問題であることを意味する。そして、自己決定は情報公開が前提にされねばならない（宗教改革の精神はきわめて近代的である！）。この救いに関する知識の情報公開に対応するのが、「聖書のみ」のスローガンに他ならない。救いの知識は、権威ある他者から伝達されるのではなく、自分で聖書を読むことによってもたらされる。

５．理念と現実の緊張：三つのスローガンによって示された宗教改革の精神は、「理念」であって、ここに、キリスト教史において広範に確認可能な理念と現実のずれを指摘しなければならない。たとえば、聖職者と一般信徒との平等性の理念は、宗教改革の伝統に立つ教会においても、必ずしも十分に実現されていない現実がある。階層的秩序は存続している。それは、信仰の自己決定と聖書の情報公開に関しても同様である。

Q：農民戦争に対するルターの対応を、この観点から論じよ。

「最初に存在していた宗教改革の感激は、間もなく燃えつきてしまった。共同体の生活は幾重にも沈滞したままだった。「キリスト者の自由」にふさわしく成熟してない人々は、ローマの政治機構の崩壊とともに、すべての教会的な支えを失ってしまったのである。ルター派の陣営においてさえ、多くの人々が、そもそも宗教改革によって人間はどれほど立派になったのだろうか、と自問する始末だった。芸術の世界において――音楽は別として――貧困化したことも見逃せない。」（ハンス・キュンク『キリスト教思想の形成者たち　パウルからカール・バルトまで』新教出版社、226頁）

（２）宗教改革から近代世界へ（時間を与えること）

６．「聖書のみ」（聖書主義）の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時間が必要であった。

聖書の近代語への翻訳／印刷技術の普及と出版システムの確立／初等教育の普及（識字率）

７．市民社会の宗教としてのプロテスタンティズム

「聖書のみ」の理念の実現のプロセスからわかるように、宗教改革の普及は、西欧世界の近代化プロセスと基本的に重なり合うものである。

聖書の近代語への翻訳　→　西欧国民文化の基礎

８．近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤

宗教改革の精神　→　自立した個人と自由・平等（理念）

西欧的な政治と経済のシステム

近代議会制民主主義（リンゼイ・テーゼ）

近代資本主義・市場経済（ウェーバー・テーゼ）

近代科学（マートン・テーゼ）

９．近代的な世俗性への二面的な関わり

17 世紀までの過程の中で、近代世界の基盤（議会民主主義、資本主義、近代科学などの近代のサブシステム）は形成され、その背後に宗教改革的な精神性の作用が確認できる。しかし、一端成立した近代は、そのいわば母体であるキリスト教から自立し、それ自身の原理で動き始める（自律性、聖俗革命）。ここに、近代とキリスト教の二面的関係が成立する。とくに、18 世紀以降、近代精神はキリスト教への批判を強め（啓蒙主義）、キリスト教はそれへの対応を求められることになる。

18 世紀以降の動向は次のようにまとめられる。

・近代性への適合　→　世俗主義の台頭と譲歩
　　合理的な宗教思想（理神論やユニテリアン）

・近代的世俗性に対する批判運動（敬虔主義、メソジスト、ペンテコステ運動、さらにファンダメンタリズム）

（３）翻訳文化とキリスト教

10. 原典・原語主義：近代の人文学は、原典主義を基本にする。これは、「知の歴史性」を自覚した歴史主義を基盤にしている。

↓

聖書研究は、ヘブライ語とギリシャ語の原典でなされる。

11. 近代人文主義１：ウルガタ（ラテン語聖書）から、原典に帰れ。

12. 近代人文主義２：聖書の近代語訳（英語、ドイツ語、フランス語など）の推進。
cf. ヒューマニズムの多義性
12. 宗教改革・聖書主義のもたらしたもの：「聖書のみ」のスローガンの実現過程＝近代国民文化形成過程（翻訳・近代語・印刷出版・教育）
ルター訳聖書、欽定訳聖書：近代語、国民文学の形成へのインパクト
↓
ヨーロッパ文化理解の鍵としての近代語訳聖書
13. The two greatest influences on the shaping of the English language are the works of William Shakespeare and the English translation of the Bible that appeared in 1611. The King James Bible ---named for the British king who ordered the production of a fresh translation in 1604 --- is both a religious and literary classic.（McGrath,1）
「英語文化の形成に大きな影響を与えてきた聖書の名句」（寺澤、i）
14. 創造活動としての翻訳。翻訳は、それ自体が新しい創造活動である。
15. 翻訳なしに宗教は可能か。生きた宗教は土着化（文化に受容されそこに根ざすこと）しなければならない。→外来宗教の土着化は、「翻訳」を不可欠の構成要素とする。
16. 翻訳された聖典は、その宗教の新しい創造的な形態となる。仏典の漢訳。
17. 「Theos」の訳：deus、God、デウス、神→既存の用語と新しい造語、あるいは音訳。
18. 「宣教師が試みた翻訳のなかで問題になったのは、キリスト教独自の概念をどのような日本語であらわすか、という点であった。ザビエルたちは、はじめ根本仏「大日如来」とキリスト教の神との超越性という類似点に着目して、唯一絶対神を「大日」と呼んでいたのだが、仏僧との議論の過程でキリスト教の教義のうえで見過ごすことのできない相違点、すなわち大日如来は万物の創造主ではないということ、仏教の世界にはイエス・キリストの受難が欠落していることに気づき、「大日」の使用を禁止する。代わりに選ばれたのは「デウス」というラテン語からの音訳語であった。」（米井、20）
愛：御大切
「キリシタンの日本語研究と翻訳の試みが刻印されたキリシタン文献は、日本語史の研究のうえで大きな可能性をもっているといえるだろう。」（25）
19. 日本語の「神」は、God の翻訳語として定着する過程で、日本語の「神」の意味内容を変容させた。

＜参考文献＞

１．ルター　『キリスト者の自由・聖書への序言』岩波文庫。
２．金子晴勇『宗教改革の精神』中公新書、『ルターの宗教思想』日本基督教団出版局。
３．Ａ．Ｅ．マクグラス『宗教改革の思想』教文館、『科学と宗教』教文館。
４．金子晴勇、江口再起編『ルターを学ぶ人のために』世界思想社。
５．徳善義和『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』岩波新書。
６．日本ルター学会編『宗教改革者の群像』知泉書館。
７．寺澤芳雄編著『名句で読む英語聖書――聖書と英語文化』研究社。
８．ピーター・ミルワード『英語の名句・名言 』講談社現代新書。
９．清水護『英訳聖書の語学・文学・文化研究』学術出版。
10. 柳父章『「ゴット」は神か上帝か』岩波書店、『翻訳の思想』平凡社。
11. 米井力也『キリシタンと翻訳――異文化接触の十字路』平凡社。
12. Alister McGrath, In The Beginning, The Story of the King James Bible and How It Changed a Nation, a Language, and a Culture, Anchor Books, 2001.
13. 鈴木範久『聖書の日本語――翻訳の歴史』岩波書店。
14. 上智大学キリスト教文化研究所編『日本における聖書翻訳の歩み』Lithon。
15. 安西徹雄／井上健／小林章夫編
『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社。